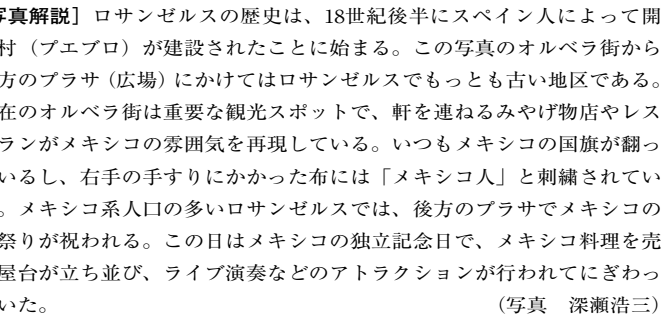
地理資料シリーズ

カリフォルニアのヒスパニック



［写真解説］ロサンゼルスの歴史は、18世紀後半にスペイン人によって開拓村（プエブロ）が建設されたことに始まる。この写真のオルベラ街から後方のプラサ（広場）にかけてはロサンゼルスでもっとも古い地区である。現在のオルベラ街は重要な観光スポットで、軒を連ねるみやげ物店やレストランがメキシコの雰囲気を再現している。いつもメキシコの国旗が翻っているし、右手の手すりにかかった布には「メキシコ人」と刺繍されている。メキシコ系人口の多いロサンゼルスでは、後方のプラサでメキシコのお祭りが祝われる。この日はメキシコの独立記念日で、メキシコ料理を売る屋台が立ち並び、ライブ演奏などのアトラクションが行われてにぎわっていた。（写真　深瀬浩三）

今年はアメリカ大統領選挙の年であり、選挙のたびに注目を集めるのが、人口増加の著しいヒスパニックである。2000年国勢調査によると、アメリカ合衆国の総人口は２億8142万人で、そのうちの12.5%がヒスパニック（国勢調査の分類では「ヒスパニックあるいはラティノ」）である。アフリカ系（黒人）は12.3%なので、いまやヒスパニックは黒人を上回る最大の少数派集団である。ただし、ヒスパニックといっても多様である。ヒスパニックの58.5%がメキシコ系であり、ついでプエルトリコ系（9.6%）やキューバ系（3.5%）が多い。

ヒスパニックの存在がもっとも重要なのがカリフォルニア州である。2000年国勢調査によると、3387万人の州人口うちの32.4%がヒスパニックである。メキシコと接するこの州では、ヒスパニックの77%がメキシコ系である。1980年にはヒスパニックの比率は19.2%であったので、過去20年間にヒスパニックが著しく増加したことが理解できる。彼らの人口は今後も増加し続けるに違いない。

もともとカリフォルニアを植民したのはスペイン人であり、19世紀はじめにメキシコが独立してから1848年までメキシコ領であった。20世紀に入ると、野菜や果物の集約的農業が発展する中で、アジア系労働者にかわって、メキシコ系は農業労働を担う存在となった。今日でも農業労働者としてカリフォルニア農業を支えているのはメキシコ系である。とくに収穫労働は彼らに大きく依存している。レタスの収穫の現場では、メキシコ音楽が流れる中で、ナイフを片手にしたメキシコ系労働者の集団がリズムに合わせて収穫していく。農業地域ではスペイン語が日常的に聞こえるし、スペイン語の看板が氾濫している。一方、彼らは都市経済を支える重要な存在でもある。ロサンゼルスにある日系人の町「リトル東京」でも、厨房で料理の腕をふるっているヒスパニックをよく見かける。

カリフォルニア州でヒスパニックの存在がもっとも顕著なのはロサンゼルス郡である。ヒスパニックは郡人口の44.6%を占めており、白人（非ヒスパニック）31.1%、アジア系11.8%、アフリカ系9.5%を大きく引き離している。ヒスパニックの居住地区はロサンゼルス大都市圏の中心部から東の郊外にかけて拡大している。ヒスパニックの多くはメキシコ系で、彼らはスペイン語を話し、メキシコ的な生活文化を維持している。このため、彼らは「アメリカ人にならないアメリカ人」と呼ばれるほどである。

メキシコ系住民の集中する居住地区はバリオと呼ばれ、そこには独特な都市景観が見られる。ロサンゼルスの一戸建て住宅には一般に開放的な前庭があるが、メキシコ系が引っ越してくると、彼らは前庭を金網などのフェンスで囲う。敷地には、サボテン、バラ、レモンなどが植えられている。また、バリオでとくに目につくのが建物に描かれた壁画である。これらは落書きではなく、ちゃんとした絵である。壁画のテーマは多様であり、宗教的なもの、メキシコの文化や歴史を扱ったもの、政治的主張を描いたもの、そして商業的な宣伝などである。

カリフォルニアでは、かつて行われていたバイリンガル（二言語）教育が廃止され、英語教育による新しい教育システムが進行している。ただ、まったく英語を話さない子どもたちのために、ロサンゼルス教育委員会では緊急移民教育プログラムを実施し、英語を教えながらアメリカ社会への適応を促している。その受講者の多くはヒスパニックの子どもたちである。カリフォルニアでは、政治、経済、文化など、さまざまな面でヒスパニックの存在は重要になっているが、将来を決定するのはこのようなヒスパニックの子どもたちなのだろう。

（東京学芸大学教授　矢ケ﨑典隆）